

Title	アナウンサーとスポーツメディア : 2018.11.29
Sub Title	
Author	石井, 大裕(Ishii, Tomohiro)
Publisher	慶應義塾大学工学部
Publication year	2018
Jtitle	人間教育講座 : 社会を知る自分を知る自分を育てる (2018.) ,p.133- 177
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Book
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=KO50001001-20180000-0133

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

2018.11.29

アナウンサーとスポーツメデイア



TBSアナウンサー

石井大裕

いしいともひろ（慶應義塾大学法学部卒）

一九八五年生まれ。TBSアナウンサー。

六歳からテニスを始め、全日本ジュニア室内準優勝、世界スーパージュニアベスト4などの成績を残す。学生時代から、イタリアを拠点に海外のトーナメントを転戦。世界ランキングを獲得も、度重なる故障に苦しみ引退。その後、MLBや中南米の野球取材を経験。二〇一〇年、株式会社TBSテレビに入社。

現在は、朝の情報番組「あさチャン！（月～金 5：25～8：00）」のスポーツキャスターなどを担当。オリンピックやサッカーW杯、世界陸上、世界バレー、アジア大会などのキャスターやリポーターを務める。

◇著書『錦織圭 限界を突破する瞬間』（KADOKAWA/角川学芸出版）

〈まずは自己紹介〉

みなさんこんばんわ、TBSアナウンサーの石井大裕です。どうぞよろしくお願いいたします。もう、超満員ですね。(会場笑い) 今日こちらに、しゃべる気満々でやってまいりました。今これだけ積極的な前の方に座って下さっているということは、もう、超変わり者か、あるいはめちゃくちゃメディアに興味がある方、あるいはアナウンサーになりたいよという方も、もしかしたらいるのかもしれません。そして、並んでメモを取りながら三年生の学生さんもあそこに待ち構えていらっしゃいますし、今日はガンガンみなさんと話し合いながら進めていければいいなという風に思っております。どうぞよろしくお願いいたします。

あらためて聞きますけども、テレビに興味ありますっていう方いらっしゃいますか？ ああ、手が上がるの早い。あ、じゃないと来ないですよ。きょうはこれだけの人数なので、どんどん質問もしていただければと思います。

私の個人的なことを言いますと、TBSに入社しましたのが二〇一〇年です。二〇〇九年に慶應義塾大学を卒業して、二〇一〇年にTBSに入社いたしました。そこから、様々なアナウンサー業務をやってきました。

アナウンサーと言いますのは、基本的に三つに分かれます。ひとつめは、報道のアナウンサー。皆さん、ニュースはテレビで見ますよね？ ニュース原稿を読んだり、あるいは外に出てリポーター

をしたり、そういうのがいわゆる報道のアナウンサーです。そしてもう一つが、バラエティ。音楽番組の司会をやったりですとか、あるいは芸人さんたちと色々楽しく進行して行ったりいうようなものがバラエティです。そして、最後の一つがスポーツ。

きょうはタイトルにもしましたが「スポーツメディア」というタイトルで、主にスポーツとアナウンサーというものに絞って今日はお話していきたいなと思っています。もし絞らなかつたら、私、三日間ぐらいしゃべり続けますので、とりあえず絞ってお伝えして行ければいいなという風に思います。

〈今年の日本スポーツ界総括〉

ちなみに、みなさん、早速質問しますけど、スポーツ中継を今年視たよ！っていう方？

あ、みんな見えますよね。（会場に）何見ました？

会場一…今年だとオリンピック……

オリンピック。何オリンピックですか？

会場一…えーっと……

冬季ですよ、冬の、平昌オリンピックです。盛り上がりましたよね。

何見ました？

会場二…アジア大会。

アジア大会、見てくれてたんですか？

会場二…はい。

ありがとうございます。私、アジア大会の司会をやらせていただきました。

そして、あと見てた方は？ はい、めちやめちやスポーツやってそうですね。

会場三…野球やってるんで。

野球やってますよね、確実にね。

会場三…野球中継よく見えます。

野球中継よく見えます…：先日私、おとといですかNPBアワーズというのに行つて来まして、丸選手にお話を聞いてきました。あと菊池雄星どこに行くんだらうっていうことも含めてむちやくちや興味ありますよね。

会場三…めちやくちやあります。

僕もめちやくちやあつて、ちよつと裏情報の後程、菊池雄星裏情報、どのチームに行くかお伝えしていきたいと思えますけど。あとは、何見ました？ 今年。

会場四…自分は、ラグビー、イングランド戦。

イングランドとの試合ですね。ロシアに勝つてよかったですね。

会場四…そうですね。

ねー。ラグビー好き？ タイガージャージは？

会場四…タイガージャージは、着てないです。

着てないんですね、大丈夫です。私は慶應義塾幼稚舎から慶應で学んでるんですけど。幼稚舎の時はラグビー部に所属しております。幼稚舎いいですよ、タイガージャージ、いきなりメンバーじゃなくても着れちゃうから。みんなに配られるんで。

じゃあ私についてですが、この人誰なんだよという方もいると思いますので、この出演番組の一部を抜粋して映像を作ってきましたので、ご覧いただきたいと思います。

(出演番組からチョイスした映像を上映)

今の映像、選手の皆さんに拍手してください。今年は何て言うんですかね、スポーツ界で言ったら、まずは平昌オリンピックから始まりまして、日本の選手たちが、羽生選手もそうですし小平選手もそうですし、もういろんな選手たちが活躍して盛り上がりました。この冬のオリンピック、めちゃくちゃ寒かったです。平昌はマイナス二十度でした。私も取材で行きましたが、マイナス二十度ですごいですよ。カップラーメンを外で食べてると麺が全部凍るんです。お箸の方も固まっちゃって大変な状況でした。とにかく、そんな中でも日本の選手たちは頑張つて勝ちました。

そして、大谷翔平選手が、メジャーリーグに渡りました。三月にメジャーリーグのアリゾナのキャンプに行きましたけど、二刀流で新人王も取つて、素晴らしい活躍を見せてくれました。

こんど六月になったらロシア・ワールドカップが始まりました。私、ロシアには一か月行きました。

サッカー見たよ、ワールドカップ見たよという方はいらっしやいますか？

——見たよね、それは、視聴率二〇%、三〇%行っちゃったものね。あの時だって、急に西野監督になっちゃって、どうすんだろ日本っていう感じだったわけですよ。そんな中で選手たちが頑張っ
て、一つになってまとまって、見事ロシアワールドカップ、ベスト十六の結果を残せました。

そして、ワールドカップが終わったら、今度はアジア大会が始まった。そのアジア大会の前には
パンパシフィック水泳がありました。私の師匠である松岡修造さんがキャスターをテレ朝でつとめ
ていたので、修造さんがパンパシフィック水泳を盛り上げてくれたので、アジア大会にいい形で、
入っていきましたから、ありがとうございますという感じでした。

でもアジア大会、あれがアジアのオリンピックって聞いた時に、皆さんスゴイって思います？
どうですか？ 考えてみてください。

いま、首ひねりましたよね。

会場五…なんか中国…：オリンピックとか見てて、トップに入ってくるのって中国が多いイメージ
なので、なんか中国との戦いになっちゃうのかなっていうイメージはあります。

中国に勝てば、金メダル獲れる、みたいな…：

会場五…そうですね。

そんな感じになっちゃいますよね。でも、実は蓋を開けてみたら意外と、この競技、韓国が強くなっ
てたとか。この競技ってインドが強いんだとか、パキスタンが強いんだとか。意外とびっくりする

ものがあつたりとか。それから、カタールにいっぱいアフリカから国籍を変えた選手がいたりとか、そういう新たなものを見ることができた。そして池江璃花子選手が六個の金メダル二つの銀メダル、女性で初めてMVPをとる。そういうこともあつて池江選手もスーパースターに駆け上がっていきました。

それが終わったら今度は、大坂なおみ選手が……あれびつくりしましたね。でも私、実は、大坂なおみ選手が全米オープン之二回戦を勝った時に、「あ、これ僕、準決勝、決勝行きまーす」って会社で無理やり予算組をしてくれという交渉をしまして、アメリカに行ってきたんです。やはりずっと追つて見てると、大坂選手がここで勝つな、輝く瞬間が近づいているなというのは、なんとなく取材している中で判るようになってくるものなんです。

大坂選手も頑張った。錦織選手も復活してきた。で、今度は世界バレーがあつて——世界バレー見た人？

見ました？ あんまり見てくれた人いない……いますね。ありがとうございます。私、司会をしておりました。

世界バレーって、これも実はですね、日本はあまり期待されていなかったんです。なぜならば、アジア大会で日本はタイに負けちゃったりとか。しかもその負け方が、初めてストレートで○対三で負けちゃった。それでみんな、女子バレーどうしちゃったんだろうって、いう感じだったんです。だけど中田久美監督や選手たち、スタッフたちが、ひとつにまとまって、今度は日本で巻き返して

やろうっていうことで、世界バレーもみごとに決勝ラウンドに駒を進めることができました。

そして、色々なスポーツがある中で、またウインタースポーツが始まってきている。紀平選手ですとか、また新たなスターが出てきている。

この流れて、二〇二〇年には、東京オリンピック・パラリンピックがありますけど、こんなに充実したスポーツが見られたのって、僕はこの一〇年で一番じゃないかなって感じていますが、どうですか？ そんな感じしません？ スポーツ好きみなさん。

総括しますと、なんでこんなに日本の選手が強くなったのかなとか、あるいは、日本の敵ってどこの国なのか、誰なのかっていうのが、すごく分かった一年だったと私、感じております。なんでこんなことを言うかというと、たとえば東京オリンピックに日本の選手たち、当然出ます。日本の選手たちが出るんですけど、それに加えて、日本に日本のライバルの選手達が、ほんとのトップの選手たちがやって来るんです。これってみなさん、ほんとに興奮することなんですよ。

たとえば日本の選手だけを追っていると、世界が見えなくなってしまう。それから、この慶應義塾は、先ほど先生とお話ししてたんですけど、イギリス代表のキャンプ地になる……それ知ってましたか、みなさん。この慶應義塾がイギリス代表の合宿地になるって知ってる人？ —— けっこうみんな知ってるんですね。

そして二年后……正確には一年半後ですけども、いよいよ東京オリンピックがやってくるということになるわけです。わくわくしてたまらないという状況になっています。私、きょうは皆さんに

色々話したいことがあります。何を話そうかなって考えてきました。まず一つ大きなテーマがあります。そこで、日本の選手たちのことはちよつと置いておきまして、世界の選手たち、世界のメディアについて、お話したいなと思います。

〈世界の選手・世界のメディア〉

まず、プロ野球好きもいるということ……大谷翔平選手、すごかったですね。メジャーリーグには今、大谷選手、平野選手、ちよつと牧田選手落ちちゃった、あと田沢選手がとか、日本の選手が何人かいるわけです。

私、メジャーリーグ、今年に入って三回取材に行きました。キャンプ、五月に行われたマー君と大谷選手の試合、そしてオールスターゲーム。オールスターには日本人選手は出てなかったんですが、ワシントンD.C.に行つて取材してきました。私、今年トータルで海外の選手百二十人にインタビューしたんです、メジャーリーガーに、本当のトップの一流選手たちに。そうすると、やっぱり立体的にメジャーリーグというものが見えてくるし、大谷選手の位置やすごさが改めて見えてくるわけです。

日本の新聞などを見てみると、これは学生の皆さんに特に伝えたいんですけど……日本の新聞って、スポーツ新聞と違って、読まれます？ 読むよっていう方——あまり読まないんですね、今。

それから、ネットのニュースはどう？ 見るでしょ。これ、新聞をなんでみんな読まなくなったかっていう一つの原因に、僕は、同じ記事が多いからというのが多分にあると思うんです。僕は、これはちよつと、自分自身も気を付けなきゃいけないと思っっています。

たとえば取材に行くでしょ——これは新聞記者とかテレビ記者を否定しているわけじゃないんですけど——取材後に、必ずみんな擦り合わせていうのをやるんです。どういふことかというところ、選手への取材はみんなでまとまって、囲み取材といって全員で取材をするんです。それで選手が答える。その囲み取材、たとえば一〇分が終わったら、新聞記者・テレビの記者がみんな集まる会があつて「こういうこと言つてたね」「こういうことも言つてたね」「これ、数え忘れてない?」「今日練習の球数、何球つていつてたっけ?」というのをみんなで擦り合わせるわけです。だから、当然同じ記事になりますよね。テレビのニュースもそうなんです。みんな同じ、だから魅力がなくなつてきている。僕はそういう風にとらえてるんです。これは、これからのメディアで変わつていかなければいけないなという部分だと思いますし、かつ東京オリンピックに向けて絶対にメディアとして進歩して行かないといけない部分だと思つているんです。

だからこそ自分自身の独自のネタだったりみたいなの、自分じゃなきゃ取材できないとか、これだけは絶対負けないよというものをメディアに行かれる方は特に、今のうちから磨いていつてもらいたいと思いますし、僕自身も磨き続けていかないといけないと感じています。

こんな習慣は、ほんとに日本だけなんです。海外のメディアの人たちと競い合つて、僕らは闘つ

ていけないといけないなと思っています。外国のメディアの人たち、特にアメリカの記者たちは、擦り合わせなんてしてないんですよ。自分たちで聞きに行く。ぼくはそれが全ての面で優れているとは言いません。でもその姿勢っていうのは、絶対忘れちゃいけない。頓珍漢な質問をしているアメリカのメディアも多いんですが、でもそれは自分たちの姿勢として独自の視点を持つということを忘れないということで、見習わなければいけない姿勢だと思って取材しています。

なんで私がこんなことを言うかというと、テニスに例えるとですね、錦織圭選手が、二〇一四年に全米オープンで準優勝しました。全米オープンとかグランドスラムの大会で、日本人選手が決勝に行くなんてことは、今まで考えられなかったんです。僕もずっとテニスを慶應義塾でやっていて、自分自身も選手として、二〇歳までイタリアを拠点にしてツアーを回っていたんです。だけど、グランドスラムで日本人が決勝に行くなんて、絶対に無理だと思っていました。でもその時に錦織選手は、自分の限界を打ち破って、二〇一四年全米オープンで決勝まで行きました。

その後……みなさん、この名前知ってますか？ ナダルって知ってますか？ これ芸人さんじゃないですよ。ナダル、知ってますよね。ジョコビッチどうですか？ 知ってますよね。フェデラーはどうですか？ 知ってますよね。錦織選手の活躍によって、みなさんはたぶん知ったんです。意味わかりますか？ なぜならば、「明日の試合の相手誰？ やべえ、ジョコビッチじゃん。勝てねえよ、これ」とか、あるいは「フェデラーだよ、フェデラーってマジすごいらしいよ。なんか、生涯獲得賞金が百億いってららしいよ」とか、「ナダルだよ。左利き、やべえなアイツ強いんだよ。足早え

よな」つてみんな自然ととらえるようになりましたよね。僕はこれは、錦織選手が我々に与えてくれた大きな大きな功績のひとつだと思っています。世界との距離を我々視聴者であつたりメディアであつたりにとって、グッと近づけてくれた。こういうたことがあることによつて、テニスついで文化はものすごく発展するんです。

大きなことを言いますと、たとえば錦織選手が一回戦で負けると、そうなるとテレビはニュースメディアとしては放送しなくなるんです。だつて錦織負けたんどもん、日本人として、やる必要ないでしょう。でも、どこかで視聴者は気になるわけですよ。「あれ、ジョコビッチ、そういうえげどうしたんだろう」「ラオニッチどうしたんだろう」みんなちよつと気になるわけですよ。そうなるとネットのニュースを見ると、ジョコビッチ全米オープン優勝、ウインブルドン優勝つて出てるわけですよ。そうするとみんなネットのニュースに食いつきますよね。でもテレビつていうのはそれがなかなかできないメディアに今なつていきます。なぜかという、尺の問題だつたりとか放送権料の問題とか、お金の問題とか、色々出てきます。だからこそ、我々は錦織君によつて世界との距離がグッと縮まつて、インターネットメディアを通してだつたりと、新聞の小さな記事だつたりとかで、「あ、ジョコビッチ勝つたんだな」とかいふことがちよつと気になるわけです。そうなるとスポーツつていうのはどんな発展していくわけですね

たとえば、大坂なおみ選手。全米オープンの決勝で誰とやつたか覚えていますか？

会場六・セリーナ・ウィリアムズ。

セリーナ・ウィリアムズですよね。覚えてたわけですよ、みなさん。そういうふうには、これから大坂なおみ選手がどんだん世界で活躍することによって、我々とテニスの世界、そしてもっとワールドワイドなスポーツの世界というのをより結び付けてくれるようになる。もうこれは、今年、日本のアスリートが頑張ったことによって、実現できたことだと思えます。

いまこうやって僕がバーツと喋ってましたけど、自分自身を振り返りますと、私テニスを二〇歳までやったと言いましたが、テニスをやっている間は慶應義塾大学法学部政治学科を休学という形をとらせていただきました。休学して海外を転戦していたんですけれど、そこから休学をやめて戻ってきて、その後、大学の授業にあまり出てなかったというところと、ちょっと先生方の前で言うのはどうかと思うんですけど……あまり出ずに、アメリカと中南米を拠点にメジャーリーグで野球の取材をずっと三年半ぐらいさせていたんです。これは実は、ひょんなことからキッカケができて、テレビ局から、外国語ができることで「英語が喋れて、スペイン語がちょっと喋れるんだったら、アメリカとか行ってみない？ 海外のメジャーリーガー、取材してみない？」という風に言われて、アメリカに渡ることになったんです。そこから三年半、それまでテニス選手だったのが、突然メジャーリーガーを取材することになって、アメリカ中を見聞きしながら取材してきました。松坂選手も松井選手も向こうに居ました。色々メジャーリーガーたちを取材してはいたんですけど、その時、日本人の選手を追いかける日本のメディアを見て、やっぱり自分自身がメディアでこれから戦う人間として、何で勝てるかなって考えた時に、スーパースターに行こうと、スーパースターのすごさ

を日本のみなさんに伝えたいという風に思ったんです。これがやっぱり、アナウンサーになってより気付くんですが、実況アナウンサーをやっていると、いきなり一年目で実況アナウンサーを目指すことになる、毎日資料を付けるんですが、一年分の資料しかないわけです。でも三〇年やってくる先輩たちを見ると、三〇年分の日本の野球の資料を持っているわけですよ。これ、勝てねえ……と。自分自身がこれからみんなに勝つためには、どうすればいいのか、その一つの解決策がスーパースターの取材だったんです。スーパースターをどんどん取材していこうと積極的にいる人たちに話を聞くようになっていきました。そして、その中で気づいた彼らに共通している特性は、スーパースターの選手たちはホントにメディアに対してもファンに対しても素晴らしい対応してくれるという事なんです。

日本の選手たちも今、世界との距離が近くなって、非常にいいコメントを言ってくれるようになってきたりとか、あるいは本心で語ってくれるようになってきたりとか、いろんな工夫を選手たちがするようになってきて、より世界というものを選手たちも意識し始めたなという感覚を取材してきて思うんです。このスーパースターたちを日本の皆さんに伝えることによって、視聴者の皆さんだったりとか、あるいは野球ファン、テニスファン、スポーツファンの皆さんがよりスポーツを好きになってくれるようになるかなと思ひ、海外の選手たちにもコメントをとるようにしています。

〈テニスと私と錦織選手〉

ここまで話をしてみました。なにかスポーツの中で、ここ熱いねとか、あるいはチョットこのスポーツの話を聞きたいよという方がいらっしやいましたら手を上げてください。

(会場を見て) テニス部ですか? もしかして。

会場七: そうです。

もう、テニスやってますっていう感じしますよね、お二人とも。今どうですか、錦織選手どうですか。

会場七: 錦織選手は、ツアーファイナルの試合でもフェデラーに勝って、決勝トーナメントには行けなかったんですけど、以前不調だったのが、やっぱりまた戻ってきたなっていう感じでしたね。

もう、解説者ですか! 坂井先生の教えですか?

会場七: はい。

その通りで、いまこうやってツアーファイナルとかいう単語が出てきますよね。私自身がテニス選手だった時に、ツアーファイナルなんて知らなかったですよ。でも、それぐらい距離があったんです。だから、そうやって普通に単語が出てくるのは、素晴らしいことですよね。

私と錦織選手との話をしますと、錦織選手が小学校六年生の時に私が高校一年生で、年齢で言うと四つ違いなんです。私もテニスをやっていて、ジュニアの日本代表でプレイしていました。そ

して修造チャレンジというのがありまして、私その一期生で、松岡修造という偉大なる慶應義塾の先輩から、指導を受けていたんです。本当に……修造さんの話をするとき長くなるので、いったん置いておきます。

錦織選手の話に戻ると、彼は小学六年生、僕は修造チャレンジのキャプテンで高校一年。年齢も一番上だったんです。僕の年代の人たちが何人かいたんですけど、このキャンプ・合宿というのは、実はジュニアの日本代表合宿なんです。全日本ジュニアとか、あるいは全国小学生大会とか、全国中学生大会とかインターハイとかで各世代のトップだけが選ばれるっていう、いわゆる代表合宿なんです。錦織選手は、全国小学生大会で優勝して来ていたわけなんですけど、ヒョロヒョロで、車に乗るとすぐ車酔いするような子で、この子大丈夫かなっていう目で見てたんです。それで、突然松岡修造さんから「トモ、あの錦織と試合をしないさ」と言われたんです。

私、実はその合宿、参加しようかどうか迷ってました。なぜならば慶應義塾高校っていうのは、そちらに加藤先生もいらっしやいますけど、結構勉強が大変で、期末試験があるということ。直前一か月間、勉強しかしていませんけど、色々な大会に出ているときは学校も休んでるので、勉強が追いついていなくて、期末の前だけ、いわゆる一夜漬けのような形で勉強を必死でしていました。その期末テストが終わった日に、その合宿にいと修造さんに言われ、そこに行ったら、小学校六年生でヒョロヒョロの錦織選手がいて、こいつと試合しろって言われて。テニスを二・三週間やってないし、でも相手は小学六年生だから、まあチョットやって、やっ

つけてやるかと思ひ、十一ポイント先取の試合をやりました。

修造さんのその合宿はすごくて、TV局のカメラが全社入っていて、日テレ、テレ朝、フジテレビ、TBS、そしてGAORAとか、が取材に入っていました。慶應義塾高校一年生、その時はテニスでトップジュニア、一番二番でしたけど、小学六年生と試合やらされて、楽勝だろうと……でも簡単に負けました。(会場笑い)これ笑えないんですけど、いやあ、びっくりしました。もうこの時に彼を見て、こりゃ天才だなと思いました。後に修造さんに話を聞くんですけど、何で僕、試合をやらされたんですかって言ったら、一番心が弱そうだった僕を、一番これから上手くなるであろう錦織選手と対戦させることによって、僕にチョット頑張つて欲しいという思いもあつたと言っていました。けど、まんまとその試合で自信を喪失してしまったわけなんです。そういう出来事があつて、この錦織はいつか凄くなるだろうって思いました。

これは不思議なもので、私がTBSに入社するときに、二〇〇七年に入社試験を受けていたんですけども、そしたらちようどそのタイミングで、錦織君が、大会に出てきてデルレイビーチという大会で優勝してツアータイトルを初めて取つたんです。そしたら私、入社試験で圧倒的に有利ですよ。だって錦織くんと試合をやったことがあるんですから。「あの、実は彼と試合やったことあるんです」なんて言うと、入社試験の面接はものすごく盛り上がるわけです。これは美味しい思いをさせていただきました。今は錦織選手とは逆に、取材する立場と選手という関係性でやらせてもらっています。

実は四日前に錦織選手と単独でインタビュをさせていただいて、四〇分ぐらい色々お話を伺いましたけども、錦織選手ももう今年で二十九歳になるんです。私は三十三歳になったんですけども、いやあもう三〇歳だねなんて話をしていて、彼も三〇歳というのは一つのターニングポイントで、スポーツ選手、特にテニス選手は運動量も多いので大変になってくるわけです、筋力も落ちてきて。その中で彼はまだまだ東京オリンピック目指して頑張ると言ってくれました。

〈言葉の持つ力〉

そのインタビュの中で非常に印象的な言葉がありました。スポーツとメディアということに関して言うならば、錦織選手は、去年の末に右手首を怪我して、苦しい思いをずっとしてたんです。ちょうど一年前に話を聞いた時に「どうですか、右手首？」って言ったら、彼は、「右手首を怪我したことを自分はものすごくポジティブにとらえています。なぜならば、この怪我によって下半身を鍛えることもできたし、強くなつて戻ることができると思います」と言ってくれたんです。ああ、そうか。でも僕は昔から彼のことを知っているから、彼の顔を見た時に「あ、これ完全に強がつてるな」と感じていました。でもその時はあえて、そのままにしておきましたけど。

そして錦織選手は、頑張つてそこから復帰してきて、四月にモンテカルロ・オープンという大会で準優勝するんですけども。記者からの質問があつたんです。錦織選手、右手首の調子はどうですかっ

て。その時に答えた錦織選手は、百分右手首は治ってますって言ったんですよ、記者会見でメディアのした質問に。それじゃあ次の日の記事には、「錦織百分万全」「錦織、右手首完治」とか色々書かれてる。

それで、四日前に会った時に錦織選手に聞いたんです。「あれ絶対、まだ痛かったですよね」と。そしたら「いやあ、むちゃくちゃ右手首痛かったですよ」と答えてくれました。ここに一つ、メディアと選手のつき合い方っていう面白部分が見られます。

「じゃあなんで錦織君、そんな百分大丈夫なんて言ったの」って聞いたたら「いやあもう鬱陶しかったですよ。メディアの人たちが手首のことばかり聞いて」って答えてました。でも彼はその「百分大丈夫ですよ」って言ったことによって、次の大会から、手首の質問は一切受けなくなっただんですよ。意味わかりますか？ 「メディアっていうのは、錦織君クラスになると常に付いていきますから、」
「」だったり新聞だったり雑誌だったり、もう色々なしつこい質問があるんです。結構ありえないような質問もあります。

みなさんは会見場にはなかなか行く機会がないと思うんですが、信じられないような質問をする記者も確かにいます。でも選手たちはそれでイラついちゃいけないというのもわかってます。たまにイラついちゃう選手たちもいますけど。でも錦織君は、その一言によって自分に流れを持ってきたわけです。そこでたとえば、「いや少しまだ痛みがあります」って言うたら、次の週も聞かれるし、またその次の週もしつこく聞かれるし。でも彼は四月の時点で、「自分は百分大丈夫です」っ

て言いきったわけですよ。

で、これが面白いのは、もう一人、いま世界を代表するアスリートである松山英樹選手というゴルフファーがいます。彼は、今シーズン調子が悪いんです。調子が悪いと本人は言ってます。でも、ツアー選手権って言われるツアー最終戦、彼はアメリカのツアーを回っていて、世界のトップ三〇人しか出られないツアー最終戦に五年連続で出場したんです。

僕らゴルフ好きからすると、その大会に出られるだけで、マジすげえ、何億この人稼いでるのっていうレベルですけど、本人はめっちゃめっちゃ調子悪いつて言っているわけですよ。でもその捉え方は、面白くて。

先月僕は、松山選手にインタビューをさせてもらいました。その中で話を聞いていると、松山選手も手首を怪我してるんです。これ錦織選手と全く同じ状況です。錦織君は記者に聞かれた質問に対して「100%大丈夫です」と答えて次の週から質問されなくなりました。でも松山選手は「いやあ、まだ痛みがありますね」と二月の時点で言ったんです。すると四月のマスターズで「手首どうですか」。次の週も「手首どうですか」と、毎週毎週聞かれる。彼、六月には手首は完治してたんですよ、でもその後もズーっと「手首どうですか」……一回言ってしまったがために、聞かれ続けたんです。先月聞いたら、メディアに手首のことを聞かれるから打ち方が気になった。やっぱりどうしても意識しちゃうのが出てるんだと。もうほんとに聞かないでほしいのに、手首は治ってるのに聞かれ続けて、治ってるのにまだ意識してしまって、自分もしかしたら手首のせいで調子が悪いのかもし

れないと思いだして、なかなか感覚が取り戻せないというのが、今も続いている。

これは非常に面白い現象だと思いました。でもそれはメディアの質問の力かもしれないし、選手に与える大きな影響かもしれない。それをどう選手たちもうまく使うか。いろんな選手たちがいますから。たとえば稀勢の里のように全くの無言を場所中貫いて、休場していく力士もいますし、あるいはその前の日まで元気だったのに突然、明日手術しますっていう白鷺みたいな力士もいますし。まあ色々なパターンがあるんですけど、これはもう選手とメディアのつき合い方ですし、逆から見れば、我々がどういう風に選手と接するかという大きな課題になつてくると思います。

僕自身は一つ決めていることがあります。選手を全力で応援するということです。まあ、若干これが松岡修造さんと被るといふ所以なのかもしれないませんが、でもそれは自分自身のライフワークだと思えます。選手たちがどうやったらベストパフォーマンスを発揮できるか、そして、どういう部分を我々が選手たちから引き出していけるか。たとえば最高の言葉だったりとか。褒めるだけじゃないんです。ある意味ベストパフォーマンスをさせるためには、時には叱咤激励しなきゃいけないインタビューもあるかもしれませんし、時には褒めることも、あるいは浮かれさせることもあるかもしれません。いろんな部分や面つていうのが出てくると思うんです。

〈選手の思いは、メディアには伝えられない〉

僕らがやらなきゃいけないことは……これはあの……TBSとかTVの採用試験受けるよ、受けてるよって方います？（会場を見て）あ、受けてる、受けてる、受けてる。これは、ちょうど採用の時期に、私がここで話しているのかどうかわかりませんが——かなりみなさん積極的な意識でこちらに来ていただいでいので……ボイスレコーダーがチラリと見えましたね——お話ししますと、今の話と、実はつながってくるんですけど、みんな選手の思いを伝えたいとか、あるいは……（会場に向かって）あ、書いたでしょ？　そういう風にエントリーシート書こうとしているでしょ。（会場笑い）これね、みんな「自分の言葉で伝えたい」「自分の言葉で思いを視聴者に」……あ、笑ってる。書いたでしょ。書こうとしてるでしょ。

会場八・他局で書きました。

他局で書いたんでしょ、だめだよ書いたら……なんて。あの……書いてもいいんです。理由がちゃんとしていれば。でも、私もアナウンサーとしてスポーツのキャスターとしてやっていますけど、自分自身で選手の思いを伝えられたなっていう時なんて、ゼロです。ごめんね、なんかショッキングなことを言っちゃって。でもこれはね。僕自身はやっぱ選手の思いって「メディアに関して言うならば、映像はありますが、選手の思いっていうのは、選手自身からしか出てこないし、そんな簡単な言葉じゃ語れないと思っています。だって、選手みたいな苦しい練習してないですよね我々は、と違ってしまってます。

なぜならば、池江璃花子選手、みなさん知ってますよね。こないだのアジア大会の水泳で、見事

に六つ金メダル取りましたけど。六つ金メダル取って、ムチャクチャ僕は、うれしい満面の笑みを大会終わった後見せてくれるのかなと思っていたんですが、池江選手、大泣きしてるんですよ、終わった瞬間に。これどういう涙だったのと私が聞きましたら「ほんとに辛かったです」と一言ありました。だってそんなの、僕らはもう嬉しい嬉しい、ワッショイワッショイですよ。池江選手のおかげで、視聴率のグラフもどんどん伸びていくし、池江選手が出てくれば視聴率が二〇%バンバン超えてくれるから。そういうことですよ。我々にしてみたら、そんなにもう素晴らしい活躍をしているから、我々と同じような笑顔かなと思っていたら、泣いたんですよ、大泣きですしかも。なぜかって言ったら、体調が悪かったとか、風邪をひいてたとか、いろんな話が出てくるわけです。

もうそれを聞いた時に、我々の一言で、特にアナウンサーに与えられる自分たちの言葉をしゃべれる時間というのは、キャスターとか、あるいは司会をやってますと一〇秒とか二〇秒とか三〇秒とか——いま僕、こんなに九〇分も時間を与えられて、喋りたくて喋りたくてしょうがないですけどね。もう朝までいっちゃおうかというぐらいですけども——それぐらい短い時間で、そんな思いつて、(会場に向かって) テニス部の皆さん、伝えられますかね？

会場九…無理です。

全く無理ではないかもしれないけれど、なかなかそれは簡単じゃないということは、言えるかも知れません。その中で僕らが何をしていかないといけないのか。それはもう、一つだけです。僕の中で一つだけです。皆さんにキチンと伝わるかどうかかわかんないですが、僕は、毎朝『あさチャ

ン！』っていう番組もやっていたりですか、スポーツの中継をやっていたりして、ひとつだけ心掛けていることは「視聴者の皆さんを筋肉痛にする」ということなんです。これ、どういうことかという、スポーツって……スポーツっやったらどうですか？ フルでテニスをやったら、テニス部の皆さん。五セットやったらどうですか、筋肉痛になりますよね。

会場九…なります。

ラグビーの試合やったらどうですか、ラグビー部の人。

会場一〇…体、翌日痛いですね。

痛いですね。どうですか、野球部の方。九イニング、百四十三試合フルで出たら。

会場十一…もう肩とかパンパン……

ですよ、アイシングが必要ですよ。そういうことなんです。僕がスポーツを伝える時に、視聴者の皆さんが筋肉痛になるぐらい、興奮してほしいんです。同じ空間に居てほしいんです。同じものを見てほしいんです。ただそれだけを思って、いつもやっています。だから、時には私と視聴者とのズレがあります。そうするとツイッターとかで叩かれるんで、エゴサーチは禁止しています。(会場笑い)会場にいる雰囲気と、視聴者の皆さんと、これ同じにするってなかなか難しいですよ。だって歓声も違うし、選手たちの息遣いも聞こえないし、選手たちの汗も見えないし。

〈会場と同じ雰囲気を視聴者に伝えたい〉

だから選手の思いを届けるとかそういうことはできないけど、この会場と同じ雰囲気を味合わせ
てやろうということは、僕はできると思っただけで毎日取り組んでいます。たとえば大坂なおみ選手が優
勝した。「いやあ、すごく嬉しくて、私涙が出ちゃいました」あるいは「いやあこのセリーナ・ウイ
リアムズに、もう勝った瞬間は、私飛び上がっちゃいました」って言っていたいろんなスポーツ
ジャーナリストの方がいらっちゃいましたけど、私は会場に居ました。会場に居て……アーサー・
アッシュスタジアム、世界で一番大きいテニスコートですよ、三万人収容する。三万人が大坂なお
みとセリーナ・ウイリアムズだけを見てるんです。そこには超スーパースターの選手も見に來たり
とか、あるいは、ハリウッドスターが見に來たりとかしたわけです。あの環境で、私は会場に居て、
優勝した瞬間、涙が出るなんてことはあり得なかったです。そして興奮して雄たけびをあげたくな
るってことは、なかったです。歴史的な大快挙です、あれは。歴史的な大快挙だけでも、それはなかつ
た。なぜならば、やはり試合を見ていた方だったりとか、試合について新聞を読んだりとかニュー
スを見た方はわかっていると違いますけど、セリーナ・ウイリアムズ選手があれだけ警告されて、い
ろんなもつれ方があって、大坂なおみ選手がじっと一人で耐え抜いて、壁に向かって頭をくっつけ
ながら集中力を高めて、そういう姿を見ていたら、もう勝った瞬間っていうのは口が開いたまま言
葉が出ないっていう、そういう状況でした。

だからこそ、僕は、優勝した時に、リポート中継をすぐしたんですけど、その時も喜びっているのは、これはもう発狂するようとか興奮するような喜びよりも、言葉が出ない喜びの表現といいますか、そういうのを終わった瞬間は伝えました。そして会場中が、一番沸き立ってスタンディングオベーションとかして、もう嬉しさに包まれたのは、大坂なおみ選手があのスピーチで可愛らしい言葉で、「もうみんなごめんなさい」と「I'm sorry」と、セリーナ・ウィリアムズがファンに向かって、「もう彼女のごことは許してあげて」と言って、大坂なおみ選手が、「セリーナのファンのみなさんごめんなさい」と謝ったあの瞬間。あの時に初めて、沸き立つ感動というか、喜びの涙が出てきましたね。

やっぱりそういうのを現場で見て感じて、それをどういう風に伝えるか。その雰囲気はどういう風に自分の言葉で選んで伝えるか。そういう仕事で、僕はスポーツの醍醐味であり、スポーツメディアの「TV」のキャスターとしてやっていかなきゃいけないことだと思っています。それは、「TV」のキャスターとしてもそうだし、「TV」の絵を作る、あるいはカメラでこれを抜く、あるいはスイッチングでカメラを切り替える、あるいはディレクターとして編集する、こういうのに全部つながってくる大きな部分なんじゃないのかなと感じています。

〈視聴者を筋肉痛にすれば「TV」とスポーツは盛り上がる〉

このTVっていうのは……もう家にテレビないよねっていう学生の方はいらっしやいますか？

みんなありますか？ けっこう訊くとなかったりするケースがあるんですけど。じゃあ、「TV」を一日一時間以上見るよって方。（三分の一程の手が上がる）おっ、だから今日、会場に来てくださった方と思うんですけどね。でも、今「TV」というものに関して、よくエントリーシートなどで出るワードとして、「TV」とインターネットとか色々なメディアがありますけど、「TV」はだんだん見る人が減ってきているけど、これを解決するためにはどうすればいいですかなんていう質問が出ます。これはもうシンプルです。視聴者を筋肉痛にすればいいんです。筋肉痛は病みつきになります。

私、現役時代、朝起きて筋肉痛じゃなかったら、不安になりましたから。部活やつてるみなさんで、これに同意する人もいると思います。まあとにかく、その臨場感をリアルにどう伝えるかっていうことが、大きな課題であると思います。だからこそ、我々アナウンサーは日頃から、言葉を勉強しなきゃいけないし、こういう時ってこの言葉がぴったりだよねというものを常に研究し続ける必要があると思うんです。それはディレクターが原稿を書く時もそうでしょうし、記者が記事を書く時もそうでしょう。それがこれからの大きなテーマになるし、「TV」がこれからまだまだ大きなメディア媒体のひとつだよと言いつけるひとつの理由ではないかなと思っています。

今、テニスの話をしましたが、何かほかのスポーツ……おっ、きましたね。
会場十二・陸上について伺いたいと思います。

来た、陸上。山形選手も小池選手も頑張ってますよ。

会場十二…今年は山形選手とか大迫選手の話題で持ちきりだったと思うんですけど、サニブラウン選手の現状を知りたいです。

現状をお話しさせていただけますか、サニブラウン選手はいまフロリダ大学で頑張ってますよ。実はですね…いいところ突きますね。めちゃくちゃ興味あります？

会場十二…大好きです。

なぜ、サニブラウン選手に魅力を感じます？

会場十二…世界陸上で二百メートルの決勝に行ったのはすばらしかったです。

ガトリンとの走りもね、素晴らしかったです。私、あの時もフィールド上に居て、フィールドキヤスターをやったんで、走り終えた瞬間にフィールドでお話を聞くんですけど、彼の魅力というのは素直さなんですよ。本音をポロっと出してくれる。彼は今、大学で陸上をやっていて、とにかくアメリカの大学というのはどんどんレベルが高くなっていて、短距離で言うならばもうホントに色々な選手がアメリカの大学でトレーニングして、世界陸上であったりオリンピックに出てくる。特に、テキサス州立大学とかフロリダ大学が強いです。クリスチャン・テイラーなんかフロリダ大学でトレーニングしています。ああいう大学出身のアスリートが世界の舞台で活躍するっていうのは、アメリカが今、陸上が強い理由ですよ。最高の環境で、トレーニングしています。実は私も取材申請をフロリダ大学に出してんですけども、なかなか降りないんですよ、取材許可が。アメリカの大学ってムチャクチャ厳しいんですよ。なかなか寮を撮影させてくれないとか。

いま彼は一生懸命トレーニングをしていて、二〇一九年はカタールのドーハで世界陸上がありま
すけど、まずはそこに向けて二百メートル百メートル。怪我ももう治ったという情報が入っていま
す。これから大学のアメリカの大会に出て……。アメリカの学生のレベルが高くなっているんです。
慶應義塾大学も是非、本来トレーニングの施設なども最高の環境が整っているので、どんどんいい
選手が出てきてほしいんですけど。アメリカの陸上のレベルの高さ、そこで採まれるっていうのが、
サニブラウン選手のポジティブな要素。いまケンブリッジ選手もアメリカでトレーニングするって
やっています。山形選手はIMGアカデミーっていう錦織選手が練習しているフロリダの合宿に行って、
そこでの陸上トラックでトレーニングするということが二月か三月に行く予定だということです。

これからの日本の短距離、さっきの話に続いてくるんですけど、日本の短距離陣がこれだけ強く
なると、「じゃあ世界でどこが強いのか？」とか興味が出てきますよね。だって日本のリレーは東京
オリンピックで金メダル取るって宣言しているわけですから。このライバルになるのは、じゃあど
こなのか？ 意外と中国が強いか、先般のアジア大会でそれがわかったわけですよ。蘇炳添って
いう選手がいるとかね。謝震業という選手がいたり、中国がリレーめっちゃ強いとか。あるい
はカタールが強いとか。こういう楽しみが増えていくというのは、皆さん覚えておいていただけれ
ばと思います。

野球の話、したそうだね？ モリーナ兄弟とか。

会場十三…はい。モリーナ兄弟もそうですし、自分、カーショウが好きなんで、カーショウにつ

いて知りたいです。

カーシヨのカーブすごいからね。あれ打てないよ。三十六億円の年俸ね。でもカーシヨに匹敵するぐらいの活躍をするんじゃないかなと僕が思っているのは、左腕の菊池雄星ですよ。あれは打てないでしょ。でも菊池雄星投手、みなさん分ります？ みなさんホントにスポーツ詳しいですね。私も相当好きなんですけど、びつくりします。菊池雄星投手が西武ライオンズからアメリカに渡るといふことでですけども、このポストイングというシステムをみなさん知っていますか？

菊池雄星投手は百億円以上の契約金になると言われていますが、ここに入ってくるのがスコット・ポラスという代理人。この人は大変な人で、松坂大輔がアメリカに行くときも出てきましたけど。三年契約で百億円ともいわれるとんでもないお金を要求する敏腕代理人なんですよ。この人が菊池雄星投手がどこに行くのかを決めるということがあります。私このポラス代理人に二〇一八年の五月にインタビューしてるんですけど、いや面白いですね。この代理人の世界もひとつ、メディア志望のみなさんがいらっしやるなら、スポーツメディアに於いてこれから一つの大きなカギになってくる職業だと思えます。

〈代理人がスポーツメディアの鍵を握っている〉

これは、野球の話から脱線しますが、日本だったりアメリカだったり、野球で言うなら台湾だっ

たり韓国だったり盛りんな国がありますけれど、日本の代理人制度っていうのは、まだまだ野球界においても確立できていないところがあります。ほかのスポーツで見ると、たとえばサッカー。比較的日本の選手は多く代理人と契約していろんな国に行っています。テニスはどうか、たとえば代理人がばっちりいるわけですよ。これがまたいろんな組織があるわけですけど。そういう人たちによって我々メディアも大きく左右されているわけです。

〈放映権料がスポーツメディアのもうひとつの鍵〉

たまたまお金の話が出ましたんで、ついでに別のお金の話をしておきますと、こないだ錦織選手が出場したATPツアーファイナルのありました。そこで、フェデラー選手に勝ちましたよね。あれっていうのは、みなさん「もつともつと色々な局で試合を見たいよ」って思いませんでした？ あれをたとえば僕の『あさちゃん！』という情報番組で試合の映像を流そうとしたら、何秒使えると思います？

会場十四…十五秒ぐらい。

それは短すぎる。

会場十四…じゃあ三〇秒ぐらい？

いい線行ってますね。こないだのあの大会っていうのは九〇秒使えたんです。でも二時間半の番

組で九〇秒しか使えないんですよ。あんな勝利したって。でも九〇秒というのはインタビュー込みなんで、試合映像として使えるのは四十五秒とか五〇秒ぐらいしかありませんよ。それに錦織選手の言葉をちょっと聞きたいじゃないですか。そうすると言葉の部分三〇秒入れるともう六〇秒しか試合の映像は使えない。テニスで六〇秒っていったらどう？ ラリー二個ぐらいでしょ。フェデラーがサーブ打って、錦織が返してフェデラーが前に詰めてボレー、錦織がロブで抜いた……みたいなので三〇秒いっちゃうから。

これで追加して映像を使いたいとなったとき、一〇秒とか一秒とかで何万円とか何十万円が動くわけですよ。そんなに払ってたら番組作れないよね。だから、いま例えばテニスで錦織君が見たいといつても、それしか見ることができないんです。これは本当に大きな問題でもあるし、しようがない部分でもあるし、スポーツをこれから盛り上げるためにはどうしていかないといけないのかというのを僕自身も考えてもがき続けている。だからこそ錦織君の映像、僕が勝手に錦織神社っていうのを作って拜んでるシーンとか、ああいう無駄な映像を入れるわけです。

それから、こないだ錦織君がフェデラーとやりました。じゃあ次の試合誰とやる？ アンダーソン選手と対戦する。アンダーソン選手ってすごく背が大きい選手。ちょっと見たいよね。錦織君、フェデラーに勝ったんだから次の試合誰とやるか、視聴者見たいでしょ。「アンダーソンっていう奴とやるらしいんだけど、アンダーソン見たことねえよ」ってなっちゃうでしょ。だからアンダーソンの試合見せたいよね。でも一〇秒で何一〇万円っていわれたらなかなか流せないよね。だから映像

が出てこないわけです。権利がないとそういう風になってしまう。

でもたとえば、アジア大会はTBSが権利を持っていました。そうしたら権利を持っているから、もう死ぬほど使えるわけですよ。だからあの大会期間中は、情報番組もニュースもTBSではアジア大会を流し続けるのです。他局では、たとえば池江選手の優勝シーンなんかを流したいけど、決まった映像しか使えないからそこしか流せない。それ以上流すためにはお金を払う必要があるから。じゃあどうやってスポーツを盛り上げていくか、逆にみなさんからアイデアをいただきたいくらいなんです。私のアイデアだと、神社ぐらいまでしかないんで。ここでどうやってスポーツを面白く伝えるか。

これはもう、僕は一生の課題だと思っています。どうやって面白く伝えるか。ひたすらそれを考えるわけです。

〈質問コーナー〉=====

「質問者一 経済学部一年男子 Yさん」

Y…僕は自身はスポーツに関してはミーハーみたいな感じで、みんなが盛り上がっているときに一緒に盛り上がるようなタイプです。だから、ワールドカップの時に、毎戦、日本戦を見ていたという

感じでした。

石井…渋谷のスクランブル交差点？

Y…そこにはいきませんでした。そこは怖かったんで、おとなしく家で見てたんです。そこで初めてサッカーが負けた時の泣く観客の気持ちっていうのがわかったんですよ。

石井…それは良い中継を見たんですね、たぶん。なぜ、その気持ちがあつたんですか？

Y…順調な流れで、ベルギーに勝てるんじゃないかという盛り上がりがあつた中での逆転であつてなく終わったって感じだったんで。

石井…空虚な気持ちになつたつてことですか？

Y…そうですね。

石井…やっぱりスポーツには、そういう力がありますし。でも本当にいい中継を見たんですね。Y…本当に、そうですね。感動しました。……質問は時にないんですけど。

石井…むちゃくちゃいい感想でしたよ。僕が言いたかつたことを全部まとめてくださいました。

〔質問者一 法学部二年男子 Tさん〕

T…同じく僕も、小学校で野球と柔道と少林寺をやつてたんですけど。

石井…むちゃくちゃやつてるじゃないですか。

T…サッカーについては、知識はあるけど経験はない中で、友達とか周りがサッカーの話で盛り上

がっついて、「何だ?」と思つて見てて、そこでお話になつたような、その場所にいる臨場感を味わえたので、さっきの話にあつたような空虚感も感じたし。

石井…やっぱり僕は、スポーツ中継の醍醐味つてそこだと思ふんですよ。視聴者みなさんが会場に居る感じ、選手たちと一緒に戦つてる感じ、つていうのをどう伝えるか…でも、闘つてる感じつてしました?

「…しましたね。他にも、実は浪人していた時にも、ちょうど二〇一六年に浪人してて、その年にオリンピックがあつて。予備校から帰つてひたすら深夜、情性でテレビを付けたら面白いのをやって、三時四時まで見ちゃうといった感じでした。戦つてる感じがしました。」

石井…そうですね。ほんとに今の言葉は、コメディアで働いてる人にとつては、もう涙流すほどうれしいと思いますよ。特にスポーツに関わつてる人間にとつては。リオはね、ああいふ時差つていうのも大きな課題でして。リオは十二時間なんです。僕もリオオリンピックに行きましたけど。たとえば平昌オリンピックつていうのは時差ないわけですよ。そうなつてくると色々テレビ局の編成も変わってくるわけです。特にオリンピックは、アメリカだったりヨーロッパが主体になつてるので、当然、払つてる額がNBCさんつてアメリカは一社でやってますから大きい。そうなると、フィギュアスケートは今回、朝やつてたでしょ。あれは完全にアメリカ時間だったりヨーロッパ時間に合わせているわけなんです。そういうのも含めて、我々は中継を組み立ててるんです。いいところに目を付けてますね。リオは夜中だった。そうなると視聴率を獲るのは難しくなります。実

私は現地でキャスターをやりました。またどの試合枠が取れるかどうかというのもポイントになります。東京オリンピックにおいても、これは課題になっていて、何のカードが獲れるかということがまだわかんないですよ。

「質問者三 法学部二年女子 Oさん」

O…私も放送権の話がすごく面白いなと思って、よくオリンピックシーズンとかだと、テレビ雑誌とかに競技放送一覧が載るのを見たことがあるんですけど。

石井…はいはい、ありますね。

O…それだけ見ると、結構平等なのかなと勝手に思っています。ただ今日の講演を聞いて、確かにワールドカップを見てたり、アジア大会はTBSが放送してるなというのを今まで全く意識したことが無かったので、聞いてみて局の間の競争というか裏側のようなものを知って、すごく面白いなと思いました。

石井…これ、ほんとに僕が言う話ではないんですけど、とにかく放送権料というのが今ものすごく値段が上がっていたりして。特に日本人が強くなると、その競技の値段が上がってしまう。スポーツメディアを熱心に見ていると、そういうルールに、もしかしてって気がつくかもしれません。

O…またその視点で、見てみたいと思います。ありがとうございます。

「質問者四 商学部一年男子 ーさん」

ー…この講演を見に来たのは、僕自身が毎日『あさチャン！』を見ていて。石井さんが来るということでもうこれは行くしかない、と思つてサークルの用事を蹴つて、いまここにいます。

石井…それは素晴らしい。じゃあ、今度僕、そのサークルに行きますから。（会場笑い）

ー…僕自身『あさチャン！』を見るまでは、結構ミーハーでどっちかという芸能の記事の方に興味があつたんですけど、見始めてからはスポーツの方に、けっこう相撲なんかに興味を持ち始めて。それは石井さんが、周りのスポーツキャスターと違う見せ方をしているからなんです。今後石井さんは、『あさチャン！』とか他の番組で、どのように自身のスポーツを報道していくかというのが気になっていきます。

石井…そうですね、基本的に僕自身は『あさチャン！』という番組に関しては、スポーツを知らないとか、スポーツにあんまり興味がない人に届けたい。常に目線としては小学生とか中学生、高校生、大学生とかが、「今日さあ、こういうスポーツあるよね」つて、ひと言仲間と話をできるようにという気持ちをもつて伝えています。だからこそ、しょうもないことをやつたりとか、くだらない質問を夏目三久さんに聞いてみたりだとかもしてます。そういう朝つてというのが、僕自身がやつぱり学校に行く前に毎日テレビ見てて、スポーツを見て、当時僕は、原辰徳さんが大好きで、モノマネしたりだとか幼稚園でしてんですけど、「今日こういうのがあるよね」とか「昨日これ凄かったよね」つていうのを学校でみんなで話してほしいと思つて、放送やつてます。でも、これは『あさチャ

ン!』という番組のことです。なぜなら、学校とか会社に行く前の時間だから。でも僕が夜の番組でスポーツ中継で出てくるときは、基本的にはスポーツの神髄を伝えたいと思います。スポーツの神髄ってというのは、先ほど言ったような「筋肉痛にしてやろう」だとか「選手たちと一緒に戦うような気持ち」でやることです。

二〇二〇年の東京オリンピック・パラリンピックっていうのは、みなさんも、いま三年生だよという方はいます? 就職活動するのに最高のタイミングだと思わない? めっちゃラッキー世代だよ。なぜならば、二〇二〇年というのがひとつの大きなカギになって、そこからどうしていくのかっていうのは、もうみなさんにかかっているんですよ。だからこそ、これから二〇二〇年以降、何をやっていったらいいのかということを考えてほしいし、僕も一緒に考えていきたいし、そこを見て、毎日から勝負していくかなという感じですかね。

…ありがとうございます。

「質問者五 一般男子 Mさん」

M:「視聴者を筋肉痛にさせる」というのはうまい表現だなと思いました。

石井:ありがとうございます。

M:それなんです、スポーツ中継について伺いたいんです。さっきお話にあったように、視聴者の中には、その競技に詳しくない人もいれば、ずーっと見てきた・応援してきたという人もいる

と思います。よく知らない人を引き込むっていうのも視聴者を引き込むひとつだと思うし、そういう人たちに向けての優しいコメントも必要だと思います。一方で、造詣の深い人に「なんだそのコメントは！」ってお叱りを受けないように、呆れられないように本質を突いた言葉も必要になると思います。さきほどおっしゃってた描写について、石井さんのバランスのとり方はどうされているんでしょうか。

石井・明日の『あさチャン！』変わってもらいたいぐらいですね。素晴らしいコメントじゃないですか。ほんとにそれはまさにおっしゃる通りで、当然スポーツファンというのは……これ、野球の実況とかをすると非常によくわかるんですけど、ラジオの野球中継って、皆さん聞いたことありますか。色々特殊な訓練を喉から血が出るほど練習しろと言われ、練習して、三年ぐらいでしゃべったんですけど、ラジオの野球中継って、とにかくリスナーの皆さんが耳が肥えてるんです。だからもう、名前の間違いとかは当然ですし、プレイの……そのラジオを聴きながら「 」を見ている人も結構いるわけです。凄く詳しいわけですよ。僕らもそれこそさっきも言いましたけど、資料を付けています。毎日全打者の、全選手の一打席一打席の全部をノートに書くんです。これ書くのに野球シーズン始まると毎日二・三時間取られるんですけども。でも彼らは三〇年間四〇年間下手したら五〇年間聞いている。そういう人たちにどういう伝え方をするといいかってというのは、これはもう勉強ですね。ひたすら知識の勉強。

だから、みなさんにもお伝えしておきたいんですけど、最近人と喧嘩したよって方いらっしやい

ますか。全然関係ない質問で申し訳ないんですが。(会場に)喧嘩した?なんで喧嘩したの?

会場十五…サークルで揉めて……

石井…何で揉めた? どういう喧嘩だったのそれは?

会場十五…練習に打ち込む度合いが、自分の方が真剣で、相手は練習さぼって試合の観戦とかに行ってちゃったりして。

石井…てことは、自分から相手に言った?

会場十五…言いました。

石井…なんて言ったの?

会場十五…なんかそれ、違くない? みたいな。

石井…って言った。

会場十五…練習来なよって

石井…って言った。これね、アナウンサーになって、僕、喧嘩しなくなっただけですよ。口論がなくなっただけですよ。不思議なもので。アナウンサーの仕事って、百調べて一出さないんですよ。意味わかりますか? 知識として知っておくんです百勉強して……勉強というよりも取材ですね。取材して、でも勉強したら、テストもそうだけど、記述式の問題って勉強したら全部書きたいですよ。出したいじゃない。でも、アナウンサーの仕事って、百学んで一出さないかぐらいの感じですよ。データも含めて、その準備ですかね。実は知ってるけど、俺、言わないよって感じですかね。

俺、言わないけど解説者に喋らせちゃうよ、みたいなの。そういう駆け引きですよ。それは視聴者だったりとか、解説者だったりとかとの。

だから、自分自身で伝えた方がいいなってことにならない限り言わないってこと。こうアナウンサーになってグツと我慢できるようになりませぬ。思うじゃない、「なんでアイツやんねえんだよ」とか「なんでアイツ観戦行っちゃってんだよ」って思うんだけど、言わないよね。そこすげえ遠回しに悪口言うか（会場笑い）、他の人にぶちまけるか。でも直接は言わない。こういうなんか術かもしれないね。それはちよつと気にしてやっていくことかもしれないね。だから『あさちゃん！』のスタジオコメントって非常に短い時間なんですけど、ほんとはもうめっちゃくちゃ知ってます、けど敢えて言わない。たとえば今日の放送で、選手の情報が一枚、写真でバーンと出る。たとえば山川穂高選手という西武のホームランいっぱい打った選手がいるんですけど、今のいっぱい打っている言い方もそうです。四十七本打ったって知ってるけど、いっぱい打ったって言う。そうすると、玄人の人たちが「なるほど」と、素人の人たちも、あまり見てない人たちも「そういうことなんだ」と判るってことですかね。どうですか大丈夫ですか、この答えで。

M…はい。

「質問者六 理工学部三年男子 Sさん」

S…ここまでできてスポーツとチョット外れて質問なんですけど。石井アナウンサーと言えばTBSの

番組と番組の間に「みなさんお疲れさまです。明日のTBSは……」っていうのが挟まるじゃないですか。ああいうのを挟むっていうのは、僕はTBSで初めて見たんですけど、あのコーナーはこういう意図で始められたとか裏話とかあれば教えていただきたいです。

石井…よく知ってくれてるね。ムチャクチャ嬉しいかも。見ていただいて、大変光栄です。あれ、三年目に入りまして、実は、こんなこと自分で言うのも何なんですけど、あれ始まってからTBSの数字が上がってるんですよ。でもそれは僕が出るからじゃないんですよ、たぶんね。あの見せ方、このあと何があるのか、あるいは今日こういうのがあるよねっていう意識付けです。それって放送局にとってすごくプラスなんだなというのを僕もやらせてもらって気づきました。あの裏話としては、午前と午後と毎日違うんですよ。一日たぶん一〇回ぐらい流れてるのかなと思うんですけど、個人的にあの撮影っていうのは、めっちゃめっちゃ気合入ってます。

これ、どうでもいい話ですけど、あの尺ってほしい三秒なんです。三秒か四秒なんです。そこでその思いを表現するってことに關して。

S・CMの撮影みたいですね。

石井…そうですね。ぼくはあれを一言で表現するなら、「パッション」です。僕は、「TVはパッションだ」と思っているの、やっぱりその人の思いだったりとか、情熱っていうのは、三秒間でも表現できるものだと思います。

「質問者七 環境情報学部四年男子 ーさん」

ー…テニスの話になってしまふんですけど、いま錦織選手だとか大坂選手がすごい活躍していて、テニスの人気やさつきから話に出ているようにフェデラーとかジョコビッチとかのランキング上位選手の知名度っていうのは上がってきていて、非常にいいことだなと思うんです。でも、逆に錦織選手と大坂選手が凄すぎて、それ以外の日本の選手でも、西岡選手やマクラクラン選手、綿貫選手、ダニエル太郎選手のようにTOP100に入ってくるような選手がすごくいっぱいいるのが知られていないと思うんです。たぶん一〇年前とか、錦織選手が全米で準優勝した前の状況ならすごく盛り上がって、日本人選手がツアーで初優勝したとかが話題になったとも思うんです。今年、西岡選手も、ダニエル太郎選手も杉田選手やマクラクラン選手もツアーで優勝してて、でも、テニスやっていない人からすれば、全然知らないっていう状況があつて、それをどうすればもっとメディアが取り上げて知名度が上がるようになるのでしょうか。

石井…十二月十五日放送の『炎の体育会TV』、錦織軍団VS芸人軍団、そこには錦織選手だけでなく、ダニエル太郎選手と綿貫陽介選手が出てるといふ番組があつて、私も出てますんで（笑）

どうやって露出するのっていったときには、やはり、情報番組だったり。そういうバラエティー番組でどうやって面白く見せるかというのを考えていくのも大きなテーマかもしれない。普通に試合を見せるのではなくて、ジュニアの選手がどうやって強くなっていくかを見せるだとか。卓球の福原愛ちゃんを追った時のように、子供のころから誰かを見つけて推していくとか、そういうの

がスターを作るひとつの方法かも。中継ができないのならバラエティ番組でどのように面白くするかとかかもしれませんね。

でも、なかなかそれは難しく、僕もずっと課題として持っていますので、逆にいいアイデアがあれば教えていただきたいと思います。

―僕も、言ったら自慢みたいになるんですけど、修造チャレンジに行つて、石井さんの話を修造さんがミーティングで言つて、錦織選手がどんだけ凄かったかを伝える時に石井さんの話をして、それで今、会っているのが感動なんですけど。

石井…それ、僕も感動ですよ、後輩に会えて。

―…それで一緒の合宿に西岡選手とかがいて。僕なんかはぜんぜんなんですけど、今凄い選手は、努力値とか…：錦織選手ほどまでは行かないけど凄いものがあつて、そういうのをドキュメンタリーとかで、みんな知らないから見てもらうことは難しいかもしれないけど、やってくれたら僕は見るなと思います。

石井…そうですね。そうやって好きなものが見られるようになるのが理想ですよ。だからやつぱりそれがこれからの課題でしょうし、じゃあどうやって視聴率につなげるか。視聴者が喜ぶだけじゃ我々はだめで、スポンサーがどうなのか、CMがどうしてここに付くのか。スポンサーと視聴者と選手たちの思いと、全てが繋がる何かについてのはこれからの課題かもしれませんね。それはこれからのメディアの世界にやってきていただいて、一緒に考えてほしいですね。